令和４年度「県中地域づくり交流会」

事例紹介

花と人と地域を育む
浪江町フラワープロジェクト
独立就農への挑戦

なみえ花工房

渡瀬（わたせ）　正教（まさのり）　・　渡瀬（わたせ）　恵美（めぐみ）

@NAMIE_HANAKOUBOU

1　福島県に移住した経緯

- 移住前の職業

正教　・・・東京築地市場の漁協職員（工務課）
冷凍・冷蔵設備のメンテナンス（第1種冷蔵機械責任者）

恵美　・・・飲食店での調理（調理師）、老人介護施設での介護（介護福祉士）

↓

豊洲移転に伴い、正教の会社部門解散

↓

- 夫婦の夢であった“田舎移住”への模索

職業スキルと交通網から探す
有楽町ふるさと回帰支援センターで情報収集

↓

川内村でのボランティア活動

2　川内村地域おこし協力隊としての活動

- 地域おこし協力隊として、ワイン用ブドウ栽培に従事

・栽培の実務
・知識の向上　・・・「ワインエキスパート」（一般社団法人日本ソムリエ協会認定資格）を取得

- ワイン用ブドウ栽培を将来の生業とすることを断念
- 地域おこし協力隊を2年で卒隊

3　独立就業までの道のり

- “食える農業”の模索

⇩

- NPO法人jinとの邂逅（かいこう）

巡り逢い

⇩

- 研修と事前準備（大型特殊）

浪江町フラワープロジェクトHP　https://namie-flower.jp/
Facebook　https://ja-jp.facebook.com/namieflower/

4　独立就農後の苦労・課題・成果

- 土壌の把握
- 大雨による冠水
- 課題
- 成果
- 今後の手応え

@NAMIE_HANAKOUBOU

なみえ花工房 Instagram
NAMIE_HANAKOUBOU

メモ

広報なみえ
2022・11月号

なみえの暮らし

浪江町へ移住就農した花き農家の渡瀬正教さん・恵美さんご夫婦と、浪江町で梨園を再開し、震災後初めて梨を出荷した笠井宏光さんを紹介します。

浪江町に移住してわかったこの町が大好きだ

なみえ花工房（幾世橋）　渡瀬 恵美さん・正教さん

チャレンジできる環境が浪江に

転職を考えていた際に、川内村のぶどう畑で人手が足りないと聞き、思い切って移住し、2年ほど働いていた渡瀬さん夫婦。

農業に携わるうち、「自分たちの手で農業をやってみたい」と思い、新規就農ができる町を調べる中で浪江町に辿り着きました。

努力の種が綺麗に花咲いた

花き農家を立ち上げて1年目、出荷時期の忙しさは二人の想像を超えていました。「8月からお彼岸までの繁忙期は、一日の睡眠時間を3時間程度まで削りましたが、作業時間が足りず、花をダメにしてしまう日もありました」と振り返ります。

大変なことも多い花き農家ですが、嬉しいことも多く「花を出荷して市場で評価されることや買った人が喜んでくれている声を聞くと、自分たちの努力という名の花が咲いて、さらに頑張ろうという種になっています」。

花づくりに関しては夫婦というよりは共同経営

夫婦二人での共同経営だからこそ、信頼して農業に専念できる利点がとても大きい。「花を束ねたりなど手先の器用さが必要な作業を恵美さん、私が力仕事や体力の必要な作業を行うことで効率よく進められています」と、正教さん。恵美さんも「私たちは二人でいる時間が長いので、喧嘩をすることもありますが、お互いを尊重し協力しています」と、二人三脚で円満な共同経営をしています。

花き農家で生きていく難しさ

専業農家で生計をたてるだけでも難しいと言われる中、二人の目標は高く「花き農家を生業として生きていくことを決めたからには、専業でも生活ができることを示して、新たに就農する人の参考になりたい」と決意を見せます。

浪江町が大好きになっていました

「浪江町は移住者を温かく迎えてくれる風土があり、とても住み心地が良いです。何か困ったことがあると周りの人達が助けてくれますし、なにより、今の私たちがあるのは先輩農家さんたちのおかげなので、とても感謝しています。それに、車で少し走ると都市部にも出られますし、近くには海、山、川と自然があるので、繁忙期が落ち着いたら、自然をどっぷり楽しんでいきたい」と夫婦二人は笑顔を見せました。

なみえ花工房

浪江町花農家〝Jinふる～る〟の代表清水裕香旦さんや先輩花き農家の川村博さんを始めとする先輩たちのもと、１年間の修行期間を経て、2022年４月に『なみえ花工房』を立ち上げた渡瀬さんご夫婦。

ご夫婦が二人三脚で出荷したトルコギキョウは東京の大田市場で、高値をつけるなど高評価を受けています。

NAMIE_HANAKOUBOU

朝日新聞　2022年12月1日（木）朝刊

「放射能は気にしなかった」夫婦で花農家に

福島県浜通り地方の水平線から太陽が昇るころ、浪江町の花農家、渡瀬正教（54）と妻恵美（49）はビニールハウスで作業を始める。日没後にハウスにいるのもざらにある。

1年間の研修を終え、4月に独立した。それ以降、無休だ。「生きているものが相手だから」（恵美）、「花と向き合う生活に慣れただけ」（正教）。

平然と話す2人だが、師匠の花農家、川村博（67）に言わせると「こっちに来て人間ががらっと変わった。特に旦那。あいさつもろくにできず、どうなるかと思った」と話す。

浜通りに来る前、正教は東京魚市場卸協同組合の冷蔵庫部門の職員だった。だが、東京・築地市場の豊洲移転（2018年）で、同部門の閉鎖が決まる。正教ら十数人が転職を余儀なくされた。

神奈川県鎌倉市に住んでいた。職場がなくなるのを機に地方への移住を考えた。

長野や静岡などを見学するなか、18年に福島県川内村へ移り、当初はワイン用のブドウ栽培を学び始めた。

「放射能の問題は気にしなかった」と正教は言う。それよりも川内村は内陸のため、冬の寒さがこたえた。「トイレのタンクの水が凍ったのを見たときは、さすがに駄目かと思った」

ブドウ農家として稼いでいけるかも不安だった。川内で働きながら、浪江町で成功した川村のもとにも通い始めた。

「花の栽培は夫婦で年2千万円稼げる」。川村が働くNPO法人「Jin」は、動画サイトでそう宣伝していた。

川村のハウスは東京電力福島第一原発から8キロ弱。だが、「魚や野菜と違い、花の販売は風評被害と無関係」と知る。

今年8月、主力のトルコギキョウを初出荷した。1カ月で200万円近くを売り上げた。

職場の閉鎖から4年。花を育てる生きがいと、浪江で暮らしていける自信を感じ始めた。それを仕向けた川村とは何者か。

（編集委員・大月規義）

キンギョソウを収穫する渡瀬正教さん（右）と恵美さん＝11月2日、福島県浪江町幾世橋

892 てんでんこ ワケあって浜通り④

野菜は風評被害…花栽培で移住「請負人」

東京・築地で25年勤めた職場を失い、福島県浪江町の花農家として歩み出した渡瀬正教(まさのり)(54)。その師匠、川村博(67)はNPO法人「Jin」の創設者だ。

川村らが育てた浪江産のトルコギキョウやナルコランは、東京五輪・パラリンピックでメダリストへのビクトリーブーケに使われた。

設立時のJinは高齢者らの介護や、利用者らが食べる野菜を作る団体だった。約8キロ南には、東京電力福島第一原発が立つ。原発事故の直後は、福島市など遠方の仮設住宅で、避難者の支援業務を請け負った。

2013年、浪江町の中心部の立ち入り規制が緩和された。川村は初日から浪江に戻り、野菜作りを再開した。

出荷前に長さをそろえる川村博さん＝11月9日、福島県浪江町幾世橋

その約半年後、花の栽培に転じる。安全な野菜を作っても、出荷となると放射能問題や風評が常につきまとうためだった。

いま渡瀬が無休で花の栽培に取り組んでいる以上に、ゼロから始めた当時の川村は必死だった。10年足らずで、花の売り上げを年3千万円に伸ばした。

福島県などが移住希望者を募る「移住体験ツアー」では、Jinを見学コースに入れるのが定番だ。九州や四国から直接、Jinを訪ねてくる人もいる。

川村は「浪江ブランド」を広げるため、栽培技術の伝授を惜しまなかった。移住や就農した人たちの「請負人」として、自治体から頼りにされた。

浪江に来る人たちの理由は様々だった。「復興に貢献したい」「自分探しをしたい」「稼ぎたい」「離婚した」……。

これまで栽培を直接指導したのは13人。そのうち浪江で就農が定着したのは5人ほど。「寒いとか体調が悪いとか言って半分は挫折した。農業を甘く見ていたのかもしれない」

一方、自分はどうか。「本業の花栽培に真摯(しんし)に向き合っているのか」。移住者の指導を重ねるたび、自身を省みる機会が増えているという。

（編集委員・大月規義）

朝日新聞　2022年12月2日（金）朝刊

ジャーナリストスクール新聞
2022年8月11日（木）
福島県生涯学習課発行

浪江の復興 繋ぐ

希望の花

～ピンチはチャンス

トルコギキョウ産地に

２班取材班
西坂　未来（福島四中３年）
河原　胡々菜（須賀川一中１年）
鈴木　涼太（富田東小６年）
及川　貴史（森合小６年）
星　叶（開成小５年）

特定非営利活動法人「Ｊｉｎ」（ジン）は、東日本大震災と東京電力福島第１原発事故後、浪江町でトルコギキョウの花の栽培を通してふるさとの復興を後押ししている。トルコギキョウは東京五輪で同町産「ビクトリーブーケ」として注目を集めた。清水裕香里代表は「浪江を花卉（かき）栽培の産地にしたい」と力強く話す。ジャーナリストスクール２班の５人は７月28日、同法人を訪問し、清水代表に話を聞いた。

震災後、「ピンチはチャンス」と栽培してきたトルコギキョウの手入れをする清水代表

２０１１（平成23）年に発生した東日本大震災で大きな被害はなかったが、原発事故の影響で避難を余儀なくされた。震災前に経営していた福祉事業は再開できず、出会ったのが「トルコギキョウ」だった。清水代表は「花づくりで世界が変わった」と話す。

花卉栽培が順調にいくと「東電のまわし者」と陰口をたたく批判的な人もいたが、「賠償金なんてもらってどうするの

もっと

私たちは、生け花を体験した。ハウスに入った瞬間、きれいなピンク色のトルコギキョウに目を奪われた。ハウスいっぱいにトルコギキョウが咲いており、好きな花の色や大きい花を選ぶのに夢

（続き）

ジャーナリストスクール新聞
2022年8月11日（木）
福島県生涯学習課発行

薄ピンク色のかがやき

数々のトルコギキョウを育てている清水代表が特におすすめの品種は「ジュリアスピンク」です。薄いピンク色をしており、花の直径は、大きいもので12～13㎝にもなります。海外のセレブに人気の品種で、しっかり水をあげれば夏場は2週間ほど、冬場は6週間ほど持ちます。

ちなみに郡山市では「あぐりあ」で売っています。ぜひ買ってみてはいかがですか。（星）

か。早く自分たちの足で立って会社をきちんとしたい」という思いが強く、気にしなかった。

清水代表の行動をよく思わない人もいたが、東京五輪のブーケなど「浪江町産」が認知されるにつれ、応援してくれる人も増え、ブランド力もついてきた。清水代表は、「補助金を使ったイベントなどで全国に復興をアピールしている人もいるが、それでは復興したとはいえない。みんなが税金を納める立場になることが本当の復興だ」と話した。

トルコギキョウの花言葉は「希望」。「震災はピンチではなくてチャンスだったと感じる。今はなにも後悔はない」と清水代表。今後の目標について「オランダで開かれる花のオリンピック（国際品評会）にトルコギキョウを出品し金賞を取りたい」と話す。（西坂）

個性あふれる生け花を持つ取材班。（左から）星、及川、西坂、河原、清水代表、鈴木の順

知りたい 生け花体験

中になってしまった。その後、切った花をスポンジに1本ずつさしてドーム型にした。花の色も1本ずつ少し異なり、バランスが難しかった。また、つぼみや葉っぱなどをアクセントにして作る生け花はとても興味深く、ひとりひとりの個性あふれるものとなった。

私が難しいと感じたのは、花とつぼみの配置とバランスだ。「大きいつぼみを加えると見栄えが良くなる」と、アドバイスを受けて一生懸命生けた作品は、難しかったが、とてもやりがいがあった。生け花は初挑戦だったが、とても楽しく、もっと花について知りたいと感じるようになった。

なにより、震災から奮起しあきらめないで花卉栽培を続けてきた清水代表の思いが伝わった。そんな清水代表が栽培しているトルコギキョウは、長くもち、あまりしおれない。家に持ち帰ったが、予想以上に長くもちびっくりしている。5年以上農業を営んでいる清水代表のトルコギキョウへの思い、福島の希望の詰まった技術はすごいと改めて実感した。（河原）

復興とＪｉｎとは？

清水代表に聞きました

私たち取材班は清水代表に浪江町の復興と法人名の由来について質問しました。

◇

Q　浪江町での復興にはどのようなことが必要だと思いますか。（及川）

A　私は被災地で大きなイベントが開催されることだけが復興だとは思っていません。自分たちが先陣を切って浪江町で花農家をし、同じく花農家をやりたいという人が多く集まってくれることを期待しています。

Q　法人名のＪｉｎの意味を教えてください。（鈴木）

A　漢字の「仁」という言葉には、いつくしむ心と徳があるという意味があります。少し重いイメージがあるので、ローマ字にして軽やかな感じにしました。いつくしむ心を大事にしています。